



▶ 前川直哉 准教授

## 福大生が当事者として災害伝承 地域実践特修プログラム(ふくしま未来学) 協働プロジェクト学修

福島大学の2年生以降で取り組む「協働プロジェクト学修」の「震災・原発事故の『伝承者』になる」プロジェクトでは、福島県の実施する「伝承者育成プログラム」に福大生が1年間参加し、学生自身が伝承者になる取り組みを行っています。

プロジェクトを担当する教育推進機構の前川直哉准教授は「南相馬市小高区での報告会で福大生が、当時小学生だった視点から原発事故を語ってくれた。もし話せるなら、学生自身が当事者性をもって語ることに意義がある」と話します。

また、「原発事故は時に制御できなくなる科学技術と人類がどう付き合うべきかという問題を突きつけた」として、「この問題に向き合わなければ、教訓なき復興になる。そのためにも、語り継ぎや考えることが大事だ」と強調しています。



▶ 南相馬市小高区で、震災当時に小学生だった視点から原発事故を語る福大生

## 相双地域支援サテライトの活動

### 教育環境整備



▲ 双葉中学校でのワークショップ

▲ 東日本大震災・原子力災害伝承館に展示された鮭のぼり

### 双葉中生ら「鮭アートのぼり」作りに熱中

福島大学「芸術による地域創造研究所」所長の渡邊晃一教授による「鮭アートのぼりプロジェクト」に協力し、2024年12月18日、ワークショップを双葉町立双葉中学校(いわき市に避難)で実施しました。中学1~3年生の生徒たち13人がそれぞれに好きな色を使い、鮭アートのぼりの制作に熱中していました。中にはサケからの連想で酒瓶を描く生徒もあり、数々のユニークな作品が完成しました。

この取り組みは、東日本大震災発災後、避難所に身を寄せた人たちに共同で鮭のぼりを制作してもらったことから始まり、形を変えながら現在まで続いています。今年度は古里に戻るサケをモチーフに作品を募集し、サケが遡上することでなじみ深い福島県浜通りを中心に、古里への思いを込めた作品を制作しています。寄せられた作品は、3月11日まで双葉町の東日本大震災・原子力災害伝承館で展示した後、浪江町や「お知らせ」にある岩手県大槌町のパネル展会場などでもお披露目の予定です。

### 地域復興支援



▲ 綱引きで競う人たち(Dory誠提供)

▲ 参加者全員で記念撮影(Dory誠提供)

### 「双葉郡大運動会プレ大会」盛り上がる

「双葉郡大運動会プレ大会」は1月25日、同実行委員会主催、福島大学地域未来デザインセンター共催で、富岡町の富岡ふれあいドームで行われました。原発事故前には、各町村で当たり前のようであった住民運動会ですが、全町村で避難指示が解除された現在でも、ほとんど再開できていません。そのような中、双葉郡在住の有志が「もう一度本気の運動会がやりたい」と実行委を立ち上げ、合同企画が実現しました。

当日は双葉郡8町村全てから総勢74人が参加し、綱引きやリレーといった定番競技のほか、音楽に合わせたダンシング玉入れ、双葉郡にちなんだお題に合った人を探す「借り人競走」など、オリジナル競技も交えながら大いに盛り上がりました。6月14日には本大会を開催する予定で、現在この大会を盛り上げてくださる仲間を募集しています。興味のある方は当サテライトまでご連絡ください。

## お知らせ 原発事故避難者の歩みを紹介するパネル展を開催します

相双地域支援サテライトは3~5月、パネル展「原発事故14年 福島『避難』のかたち」を東京と福島、岩手で開催します。原発事故の影響で古里や慣れ親しんだ土地から離れざるを得なかった8組9人の現在の暮らしと想いを、写真や記事を通して紹介します。入場無料。

- 岩手展 日時:2025年3月1日(土)~10日(月)9:00-22:00(最終日17:00まで)  
場所:大槌町文化交流センターおしゃち(岩手県上閉伊郡大槌町末広町1-15)
- 東京展 日時:2025年3月22日(土)~27日(木)9:30-17:00  
場所:練馬文化センターギャラリー(東京都練馬区練馬1-17-37)  
※3/22(土)14:00~クラフトビレッジ西山(東京都目黒区原町1-7-8)で南相馬市からの避難者、井上美和子さんの朗読劇「ほんじもよお語り」
- 福島展 日時:2025年4月11日(金)~5月9日(金)9:00-20:45(最終日15:00まで)  
場所:福島大学附属図書館(福島市金谷川1)



「相双の風」は、被災地域の今と、福島大学地域未来デザインセンター相双地域支援サテライトの取り組みを紹介するニュースレターです。相双地域支援サテライトは被災地と福島大学をつなぐ現地拠点として、被災地域復興に向けた支援活動を行っています。



TOPICS | トピックス

## 大熊町の帰還困難区域、旧熊町小を視察 13年前の教室そのままに

木村紀夫さん(中央奥)の説明を聞く学生ら

福島大学は2025年1月19日、スタディツアー「大熊未来塾の災害伝承〜汐凧さんの捜索から、もうひとつの福島再生を考える〜」を大熊町で開催し、学生・教職員27人が参加しました。

当日は大熊未来塾代表理事の木村紀夫さん(59)による案内の下、大熊町の協力を得て、帰還困難区域にある中間貯蔵施設内に立ち入り、震災で犠牲になった次女・汐凧さん(当時小学1年生)が通っていた旧熊町小学校や木村さんの自宅跡などを視察しました。旧熊町小の教室には、授業で使われていた絵本や国語辞典、ランドセルなどが当時の状況そのままに残されており、参加者からは「原発事故が生んだ時間を感じることができ、何かを訴えているようにも感じた」「これからも当たり前が続くだろうと思っていた日常が思いがけない形で一変してしまったのだという事実を痛感した」「残された人の思いが一番大事。今後、この建物をどうするのか、遺族や卒業生、関係者でこれからも話し合いを続けていく必要がある」といった声が上がりました。

## 3.11を語り継ぐ 被災と原発事故、復興の現場から 何を伝えるのか

東日本大震災と福島第一原子力発電所の事故から14年が経過し、その記憶の風化も危ぶまれています。また被災12市町村の現状も十分に地域外に伝わっておらず、復興の歩みを語る取り組みも重要です。被災と原発事故、そして復興の現場である大熊町と双葉町で、災害伝承に取り組む2人に聞きました。



相双地域支援サテライト  
キャラクター そうそうくん

## 誰かを犠牲にする社会変えねば 声なき声拾う

一般社団法人 大熊未来塾 代表理事 木村紀夫さん



▶ 中間貯蔵施設内の自宅跡で汐凧さんについて語る  
木村さん

2011年3月11日、大熊町を襲った津波で、父と妻、次女汐凧(ゆうな)の3人を亡くし、当時の自宅(現在は中間貯蔵施設内)の4キロほど北にあった福島第一原発の事故で捜索を阻まれ、汐凧の遺骨発見まで5年9カ月を要しました。

2013年ごろ、自分の生活や取り組みが報道で誤って受け取られたことがあり、自ら伝える必要性を感じました。その後、避難先の長野県からいわき市に戻り、2020年に伝承活動のため大熊未来塾を立ち上げました。ちょうど新型コロナウイルス感染症が流行し、オンライン配信で中間貯蔵施設内を案内するツアーを実施しました。コロナ禍が落ち着いた現在は、中間貯蔵施設内のフィールドワークと、施設外での講演の回数が増え、2024年度は2,500人ほどに語ったことになります。

語り始めた当初は、主に事実や自分の経験のみを伝えていましたが、その後、行政や東京電力とのやり取りを経て内容が増えました。また、沖縄や水俣に行ったことで加わった事柄もあります。今の社会は、誰かの犠牲の上に成り立つ構図になっています。沖縄戦も水俣病も、この構図は福島原発事故と共通しています。誰かを犠牲にする社会を、自分たちで変えていこうと伝えるために語っています。震災の風化よりも、社会問題に無

関心な人が多いのが問題だと思っていて、自分の頭で、防災や復興、社会問題を考えることの重要性を伝えたいと思っています。

震災伝承については、国や自治体、電力会社が作った伝承にならないことが大事です。表現されないような声を慎重に拾い上げて聞いていかないといけない。大熊未来塾でも、そのような活動に取り組んでいて、広げていくことが必要だと思っています。

2045年以降になるでしょうが、中間貯蔵施設は汐凧の学んでいた熊町小学校も含め、そのまま残して震災の教訓を学ぶ場になれば良いと思います。大熊未来塾としても、他に犠牲を出さない生き方を模索するために、衣食住を自給自足し、極みを出さない生活を学ぶ、学校のような場を中間貯蔵施設内に作りたいと考えています。

## 「動き出した町」伝えたい 自分の言葉でありのまま

一般社団法人 ふたばプロジェクト 震災伝承事業担当 小泉良空(みく)さん



▶ JR双葉駅前での町の現状を説明する小泉さん

JR双葉駅周辺や町内で、来訪者や教育旅行の参加者らに対して原発事故後の双葉町の歩みや現状を説明しています。

私は隣接する大熊町の出身で避難の経験もあるため、この地域で何が起り、今がどういう状況なのかということにまず自分自身が向き合い、学ぶ姿勢を大切にしています。地元なのでなおさら、町外から来た方々に誤解されないように事実関係をきちんと調べ、なおかつ自分の言葉で発信しようと心掛けています。

着任した2021年当時は、ごく一部を除いて避難指示が解除されておらず、前年に全線再開した常磐線などを利用して来る人たちに、双葉駅旧駅舎の案内所まで対応してました。人口がゼロだった双葉町に関心があって訪れる方が多かったのですが、原発事故の問題がデリケート過ぎることもあり、状況が的確に認識されているとは言い難い雰囲気も感じました。そんなこともあって、より正確な情報を伝える重要性を痛感しています。

原発事故から14年。自分が事故当時、この地域に何を感じていたのか。では今、どう関わっていくべきなのか。事故後に外から関係を持ってくれた人たちの動きも面白い。こんなことに思いを巡らせ、震災前とは違った意味でこの地域が好きになっています。

友達の家が解体されて更地になったり、ただ建物が朽ちていったりするだけなど、正直あまり見たくない光景もあちこちにあります。そんな町の中でも、最近は笑顔で過ごす住民が増え、何か楽しいことを起こそうとする営みが見えてきて、うれしくなります。

町は前に進んでいて、後退していません。ゴーストタウンの時間が止まっているのだと、いまだに表現されることがあり、前は「そうだよね」と認めていたのが、最近はそう言われると反論したくなります。どちらの側面もあるというのが今で、全部進んでいるわけでも、全部止まっているわけでもなく、今まさに「動き出した」という事実をありのままに伝えることが大事だと思っています。

### 取り組み

## 大熊町で「語り継ぎ」や 双葉町伝承まち歩き



福島大学公式  
マスコットキャラクター  
めばえちゃん

福島大学の2年生以降で取り組む、ふくしま未来学の「協働プロジェクト学修」。相双地域支援サテライトでは2024年度「大熊町と川内村での歴史と災害の記憶の継承」というプロジェクトを行い、4人の学生が大熊未来塾の木村紀夫さんの語りの一部を担当する「語り継ぎ」を行いました。担当した学生の1人は「当事者の話からしか伝わらないことも多いが、その話を聞いて自分が感じたことを整理して伝えていくことも大切だと考えるようになった」と話していました。

双葉町でも「ふたばプロジェクト」のスタッフを対象に、東日本大震災以前の町について詳しい町役場職員に、双葉駅周辺の震災前の様子などを案内してもらいながら歩く「双葉町周辺伝承まち歩き」を2024年6月19日に実施しました。



▶ 2024年9月、木村さんの「語り継ぎ」  
を行う福大生



▶ 2024年6月、「ふたばプロジェクト」  
スタッフを案内する町役場職員